

ブリーフィング・メモ

政治と戦争——クラウゼヴィッツとデルブリュックを手掛かりにして

戦史研究センター国際紛争史研究室長 石津 朋之

はじめに

戦争とは何か、そして政治と戦争の関係性について考える際に議論の出発点としてしばしば言及されるのが、プロイセン＝ドイツの軍人で戦略思想家カール・フォン・クラウゼヴィッツである。そこで、この小論では第1に、クラウゼヴィッツの『戦争論』と彼の戦争観を概観し、第2に彼の戦争観をより具体的に理解するためドイツの歴史家ハンス・デルブリュックの歴史観を検討する。最後に、これらを手掛かりにして今日における『戦争論』の有用性について考えてみたい。

1. 戦争の「政治性」

クラウゼヴィッツは『戦争論』の中で、①戦争には2種類の理念型が存在すること、②戦争は他の手段を用いて継続される政治的交渉に他ならない、という2つの問題意識の下、「戦争における諸般の事象の本質を究明し、これら事象とそれを構成している種々の要素の性質との関係を示そう」とした。

彼は戦争の本質を「拡大された決闘」と捉える。戦争は一種の力の行為であり、その旨とするところは敵に自らの意志を強制することである。また、戦争は常に生きた力の衝突であるため、理論的には相互作用が生じ、それは必ず極限にまで到達するはずである。こうした論理展開からクラウゼヴィッツは、戦争の原型、「絶対戦争」という概念を導き出した。戦争が自己目的化する傾向が強いのは、まさこの理由による。そして彼は、この戦争の原型から必然的に得られる帰結として、戦争の究極を敵戦闘力の殲滅(せんめつ)に見出した。

だが同時にクラウゼヴィッツは、戦争がそれ自体で独立した事象でない事実もまた理解しており、戦争には現実における修正、「制限戦争」が生まれると指摘する。これが、クラウゼヴィッツによる戦争の2種類の理念型、すなわち、理論上の「絶対戦争」と現実における「制限戦争」である。

『戦争論』で示されたクラウゼヴィッツの戦争観で、政治と戦争の関係性をめぐってとりわけ重要なものとして、彼が戦争を政治に内属すると位置付けた事実、戦争を政治の文脈の中に組み入れて議論した事実、が挙げられる。

クラウゼヴィッツによれば、戦争は政治的行為であるばかりでなく政治の道具であり、敵・味方の政治的交渉の継続に過ぎず、外交とは異なる手段を用いてこの政治的交渉を遂行する行為である。彼の論理に従えば、当然、政治的意図が常に「目的」の位置にあり、戦争はその「手段」に過ぎない。また、そうであるからこそ、この政治の役割が、理論的には「絶対戦争」という極限に向かうはずの戦争を抑制する最も重要な要素とされるのである。

クラウゼヴィッツが『戦争論』で「戦争がそれ自身の文法を有することは言うまでもない。しかしながら、戦争はそれ自身の論理を持つものではない」と記したのは、この戦争の政治性に注目した結果である。

2. クラウゼヴィッツの戦争観の継承

次に、政治と戦争の関係性をめぐるクラウゼヴィッツの立場をほぼ正確に継承し、学問としての軍事史の確立に大きく貢献した歴史家として、デルブリュックが挙げられる。デルブリュックは、①「軍事史家」としての一面に加え、②当時は一般国民に馴染みの薄かった戦争について平易な説明を試みた「解説者」としての一面、③第一次世界大戦でのドイツの戦争指導に異論を唱えた「批判者」、という3つの顔を併せ持つ人物である。軍事史家としてのデルブリュックの代表作は『政治史の枠組みの中の戦争術の歴史』であり、「実証批判」や比較歴史学といった研究手法を駆使し、政治の枠組みの下で戦争の歴史を考察すると共に、ある国家の体制とその戦略の関係性について明らかにした。その過程で彼は、あらゆる時代にはその時代の社会や政治を反映した固有の戦争形態が存在する事実を指摘した。

解説者としてのデルブリュックは、第一次世界大戦中にその真価を発揮し、雑誌『プロイセン年報』などを通じて戦況や戦略の説明に努めた。また、大戦後の彼は、批判者として知られ、エーリヒ・ルーデンドルフに代表されるドイツの戦争指導のあり方を厳しく追及した。

以下では、第一次世界大戦を事例として政治と戦争の関係性をめぐるデルブリュックの立場を考えてみたい。

最初に結論的なことを述べてしまえば、デルブリュックにとってこの大戦ほど、自らが理想とする「政治による戦争指導」と現実に生起した「軍事による政治指導」との落差が顕著であった例はなかった。

彼は、いかなる戦争方法を用いるかを決定するのも、いかなる軍事戦略を用いるかを決定するのも、政治の責任であり、仮に政治目的から逸脱した形で軍事戦略が実施されれば、国家運営全般に対する障害になると認識していた。その結果、彼は常に「交渉による平和」の基礎を提供し得る戦争方法を唱えた。つまり、敵との交渉の窓口は閉ざしてはならず、敵がその窓口を閉ざすことになるような軍事戦略は用いてはならないのである。

3. 第一次世界大戦とデルブリュックの立場

より具体的に第1に、デルブリュックはドイツが敵の同盟体制を破壊することに集中、イギリスとフランスの政治的離反を図るべきであると唱えた。同時に、この敵の同盟強化を懸念した彼は、ドイツの無差別潜水艦作戦に強硬に反対した。なぜなら、これを口実としてアメリカが大戦に参戦する可能性が高く、仮に同国が参戦すれば、ドイツが勝利する可能性は低くなるからである。

第2に、デルブリュックは敵の完全な殲滅を目指す戦略にも反対した。例えばかつてナポレオンは、フランス革命戦争及びナポレオン戦争の緒戦で圧倒的な軍事的勝利を得た結果、「成功の極限点」を踏み越え、結局は和平への機会を逃し、逆に、敵の抗戦意志と同盟体制を強化させ、最終的には敗北へと追い込まれた。仮にドイツが、戦場で圧倒的な軍事的勝利を得たとしても、ヨーロッパ大陸での同国の覇権確立を他のヨーロッパ諸国、とりわけイギリスは許容することはなく、却って戦争の長期化に繋がってしまう。

第3に、この大戦を通じてデルブリュックは、ドイツには中立国ベルギーを併合する意図がない旨を国際社会に宣言するよう、また大戦が終結次第、同国がベルギーから無条件に撤退する旨を宣言するよう、提言を続けた。彼は、ドイツがヨーロッパ大陸で領土的野心を有する限り、戦争の終結は不可能であることを理解していた。

第4に、戦争の道義的側面への配慮が当時の「時代精神」になりつつあると理解したデルブリュックは、ドイツ内外での強硬な「ドイツ化政策」を控えるよう主張した。なぜなら、仮に同国が他民族に対する圧政者と見られれば、国際社会で孤立、中立諸国からの支持が得られないからである。

第5に、1918年春にドイツ軍が実施した軍事攻勢についてデルブリュックは、たとえこの攻勢が成功しても、大戦を真の意味での勝利へと導く政治的意味を持ち得ないと考えた。この攻勢は、敵を和平交渉の席に誘い出すための、より広範な政治攻勢の一端を担うべきであったのである。

こうしたデルブリュックの提言に対し、実際にドイツの指導者がいかなる戦争指導を行い、第一次世界大戦がいかなる結果をもたらしたかについて、詳述は控える。ここでは、①ドイツの無差別潜水艦作戦がアメリカ参戦の大きな要因となった、②主としてベルギーに対するドイツの強硬な政策により、イギリスとフランスは決して和平交渉に応じようとしなかった、との事実を指摘するだけで十分である。

4. 今日における『戦争論』の妥当性と有用性

人々が意識しているか否かは別として、今日の国際社会はクラウゼヴィッツの戦争観の枠組み（パラダイム）の中にある。一方で今日の国際社会は、核兵器と共存するしかない時代を生きている。他方、今日の民主主義社会では、文民統制という政軍関係のあり方は必須の条件である。そして、ここに『戦争論』の有用性が見出されたのである。

だが、思えばクラウゼヴィッツの戦争観は、民主主義社会での文民統制の概念とは無関係である。彼は王政下で『戦争論』を著したのであり、民主主義といった社会制度など全く想定していない。また、なるほどデルブリュックは第一次世界大戦末期に文民統制の必要性を唱えたものの、それは大戦でのドイツの戦争指導があまりにも酷いと考えた結果であり、それにもかかわらず彼は、ドイツの帝政とその伝統的な軍人階級の優位性を固く信じて疑わなかった。

さらに踏み込んで考えてみれば、はたして戦争は政治の継続であるとする戦争観の妥当性についてはさらなる検討が必要とされるのであり、この事実はとりわけ今日に当てはまる。

仮に政治とは戦争を行わないことであるとすれば、戦争は政治の継続ではなく、破綻となる。事実、クラウゼヴィッツが示した「戦争の霧」や「摩擦」に対する批判と併せて、「『戦争の霧』や戦争が生む『摩擦』がもたらす意図せざる結果の重大さこそが、クラウゼヴィッツの戦争観を無効にする。戦争とは決して現行の政治の継続にはなり得ない。戦争とは全く新しい政策、しかも本来の政策とは全く矛盾するような政策を生み出すものである。意図せざる、もしくは予測できない結果は、意図された目的よりも遥かに長期的な影響を持つものであり、しばしば本来の目的に反作用するものである」といった強い反論も存在する。

だが、こうした批判や問題にもかかわらず、1945年以降の核兵器の登場と民主主義社会の急速な拡大の結果、改めてクラウゼヴィッツが注目されたのである。戦争や軍事力行使に際して政治による慎重な判断が強く求められるようになったからである。

よく考えてみれば、これは『戦争論』の誤用あるいは乱用かもしれない。実際、ゲルハルト・リッター、マイケル・ハワード、バーナード・プロディ、ピーター・パレットに代表されるクラウゼヴィッツの戦争観を継承するとされる研究者は、いずれも核時代の「申し子」であり、クラウゼヴィッツの戦争観を自らが生きる時代に合わせて再解釈しているとも言える。

事実、はたして本当にクラウゼヴィッツが政治の優位性を認めていたのかをめぐっては、今日でも歴史家の評価は分かれており、そもそも政治の優位性を示唆する「三位一体」といった表現も、『戦争論』で1度しか言及されていない。

おわりに

それにもかかわらず、『戦争論』は今日の政治と戦争の関係性を考えるための必読書である。なぜなら、クラウゼヴィッツの戦争観は今日の「時代精神」として定着しており、戦争について考える際の規範として広く認識されているからである。言い換えれば、クラウゼヴィッツの『戦争論』はその妥当性には多々疑問が残る一方、依然としてその有用性は高いのである。

参考文献

Michael Howard, Clausewitz: A Very Short Introduction (Oxford: Oxford University Press, 2002).

Gordon A. Craig, "Delbrück: The Military Historian," in Peter Paret, ed., Makers of Modern Strategy: from Machiavelli to the Nuclear Age (Oxford: Clarendon Press, 1986).

清水多吉、石津朋之共編著『クラウゼヴィッツと「戦争論」』彩流社、2008年。

ケネス・J・ハイガン、イアン・J・ビッカートン共著、高田馨里訳『アメリカと戦争——1775—2007』大月書房、2010年。

本稿の見解は、防衛研究所を代表するものではありません。無断引用・転載はお断り致しております。
ブリーフィング・メモに関するご意見・ご質問等は、防衛研究所企画部企画調整課までお寄せ下さい。

防衛研究所企画部企画調整課

外 線：03-3260-3011

専用線：8-6-29171

FAX：03-3260-3034

※防衛研究所ウェブサイト：<http://www.nids.mod.go.jp>